

# 転重軽受法門

文永八年一〇月五日 五〇歳

修利槃特すりはんどくと申すは兄弟二人なり。一人もありしかば、修利槃特修利槃特と申すなり。各々三人は又かくのごとし。一人も来たらせ給へば三人と存じ候なり。

涅槃經に転重軽受ねはん てんじゅうきょうじゆと申す法門あり。先業の重き今生しんじゆにつきずして、未来に地獄の苦を受くべきが、今生にかゝる重苦に値ひ候へば、地獄の苦しみぱつときへて、死に候へば人・天・三乗・一乗の益えきをうる事の候。不軽菩薩ふきようぼさつの悪口罵詈せられ、杖木瓦礫がりやくをかほるも、ゆへなきにはあらず。過去の誹謗正法のゆへかとみへて「其罪畢已」と説かれて候は、不軽菩薩の難に値ふゆへに、過去の罪の滅するかとみへはんべり。又付法蔵の二十五人は仏を除のぞきたてまつりては、皆仏のかねて記しを量き給へる権者なり。其の中に第十四の提婆菩薩たいばは外道にころされ、第二十五師子尊ししそんじやは檀弥栗王に頸を刎ねられ、其の外ぶつだみ陀密多・竜樹菩薩りゅうじゆなんども多くの難難にあへり。又難なくして、王法に御帰依いみじくて、法をひろめたる人も候。これは世に悪国・善国有り、法に摂受・折伏あるゆへかとみへはんべる。正像猶かくのごとし。中国又しかなり。これは辺土なり。末法の始めなり。かゝる事あるべしとは、先に思をもひさだめぬ。期を待こそまち候ひつれ。この上の法門は、いにしえかみ申しを古き候ひき、めづらしからず。

円教の六即の位に観行即と申すは「行ずる所言ふ所の如く、言ふ所行ずる所の如し」云云。理即・名字の人は円人なれども、言のみありて真なる事かたし。例せば外典の三墳・五典等は読む人こてんがずを数しらず。かれがごとくに世を治をさめふれまう事、千万が一つもかたし。されば世の治をさまる事も又かたし。法華經は紙付に音をあげてよめども、彼の經文のごとくふれまう事かたく候か。譬喩品に云く「經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん」と。法師品に云く「如来の現在すら猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」と。勸持品に云く「刀杖を加へ乃至数々擯出せられん」と。安樂行品に云く「一切世間、怨多くして信じ難し」と。此等は經文には候へども、何の世にかゝるべしともしられず。過去の不軽菩薩・覺徳比丘なんどこそ、身にあたりてよみまいらせて候ひけるとみへはんべれ。現在には正像二千年はさてをきぬ。末法に入つては、此の日本国には当時は日蓮一人見み候か。昔の悪王の御時、多くの聖僧の難に値ひ候ひけるには、又所従眷屬等・弟子檀那等いくそばくかなげき候ひけんと、今をもちてをしはかり候。今日蓮法華經一部よみて候。一句・一偈に猶受記をかほれり。何に況んや一部をやと、いよいよたのもし。但をほけなく国土までとこそ、をもひて候へども、我と用ひられぬ世なれば力及ばず。しげきゆへにとゞめ候ひ了んぬ。

文永八年辛未十月五日

日蓮花押

大田左衛門尉殿  
蘇谷入道殿  
金原法橋御房  
御返事